

考古学者 原田大六論 (五)

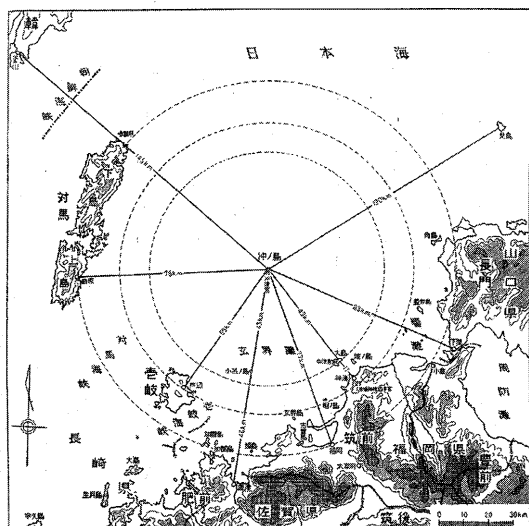
— 沖ノ島の発掘調査 —

菊池 誠 一

本稿は、『学苑』七六九号に掲載された「考古学者 原田大六論(四)」のつづきであり、原田大六が福岡県宗像郡沖ノ島の発掘調査にたずさわった昭和二九(一九五四)年からその報告書の刊行された昭和三六(一九六一)年までの期間を、おもに沖ノ島調査に焦点をあてながら、その足跡をおう。

なお、文中の敬称は省略し、引用文の明かな誤字・脱字は訂正した。

二一 玄界灘の孤島、沖ノ島



沖ノ島の位置 (『沖ノ島』P. 2より)

玄界灘のただなかに浮かぶ沖ノ島は、潮流のはやい対馬海流とその風波によってつくりだされた断崖絶壁を海に屹立させる標高二四三m、周囲四kmほどの小さな島である。周辺にはほかに島などがないため、航行する者のひとつの目標となり、また風波を避ける避難場所ともなった。この島に

は、宗像大社の祭神である宗像三女神の市杵島姫命、湍津姫命、田心姫命のうち、田心姫命を祭る沖津宮があり、神の宿る島として古来より崇敬されている。宗像三女神とは、日本神話に登場する天照大神と素戔嗚尊の誓約によって誕生した神々である。

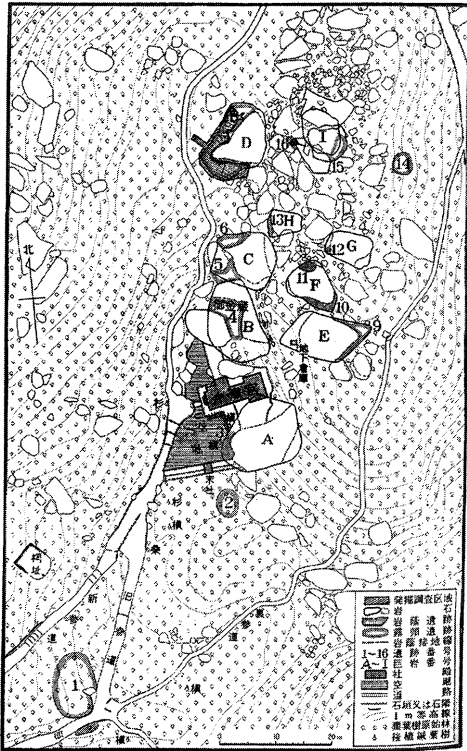
昭和二九(一九五四)年から四六年にかけて、この沖ノ島で三次にわたる学術調査が実施され、巨岩とその周囲から、四世紀から九世紀にいたるさまざまな祭祀遺物が出土した。その結果、沖ノ島における祭祀は、古代大和王権とふかくかわる国家祭祀場として認識され、その具体相として、巨岩上で執りおこなう岩上祭祀(四～五世紀)、巨岩の陰で執りおこなう岩陰祭祀(六世紀前後)、岩陰から露天へと変化する段階の半岩陰・半露天祭祀(八世紀はじめ前後)、そして露天祭祀(八世紀半ば以降)へと、おおきく四段階にわたる変遷があきらかとなった。出土した遺物は、時代ごとに様相を異にしており、岩上祭祀や岩陰祭祀では、古墳の出土遺物と共通する三角縁神獣鏡や新羅製とかんがえられる金銅製馬具類、金製指輪、ササン朝ペルシャ系のガラス碗など、当時の第一級の古墳から出土する遺物をしのぐものがみられた。半岩陰・半露天祭祀や露天祭祀では、金銅製竜頭、唐三彩や石製形代などがみられ、とりわけ金銅製竜頭、唐三彩などは、アジアとの文化交流を物語るものであり、『海の正倉院』とよぶにふさわしい内容と豪華さであった。

絶海の孤島に、こうした数々の貴重な遺物が出土した背景には、沖ノ島を中心

とする半径六〇〜七〇kmのなかに対馬、壹岐、そして九州本土があり、また、直線距離にして一四五kmのところに朝鮮半島があるという、沖ノ島の立地にある。沖ノ島は古来より朝鮮と九州間の海上交通の要衝であり、古代大和政権の国家祭祀場としての性格、大六にいわせると「南朝鮮諸国を威圧する祭祀」、「対大陸侵略の守護神」としての性格、をもっていかんがえられている。

大六は、この沖ノ島調査の第一次(第一回〜第四回)の第二回(昭和二九年八月・第三回(昭和三〇年六月)・第四回調査(同一〇月)、そして第二次調査(第一回・第二回)の第一回(昭和三二年八月)・第二回調査(昭和三三年八月)に参加した。その後、報告書作りにはほとんど単独で従事し、大六はのちに「沖ノ島はわたしの大学だった」と語ったように、その整理作業に心血をそそぎ、正統二冊の大著『沖ノ島』(昭和三三年)と『続沖ノ島』(昭和三六年)を刊行した。当時、日本考古学協会委員長の藤田亮策(東京芸術大学教授)がその序に「原田大六氏苦心の実測図が光彩を添えている」と、のべたように同書には毛筆で描いたという神技の実測図が掲載されていた。

二二 沖ノ島第一次調査



中津宮付近の祭祀遺跡(『沖ノ島』第12図より)

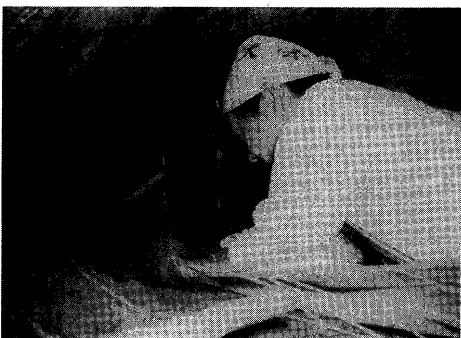
沖ノ島発掘調査の発端は、宗像出身の故出光佐三(当時、出光興産社長)が、その祭祀を本来の姿に復さんと志し、宗像神社復興期成会をおこし、宗像神社の神域の整備や、神社史の編纂に着手したことにある。その一環として、沖津宮の鎮座する沖ノ島の調査が計画された。

昭和二九(一九五四)年五・六月の第一次第一回調査は、調査団長に成蹊大学教授の小島鉦作(神社史編纂主任)、団長補佐・現地主任に鏡山猛(当時、九州大学助教授)があたり、調査員五名、補助員二名などの陣容であった。補助員は当時、学生であった小田富士雄(のちに福岡大学教授)と松岡史(のちに佐賀県教育委員会勤務)であった。調査の目的は、遺跡の一〇〇分の一の地形図作成、各遺跡の現状調査と一部の試掘などであった。

同年八月の第一次第二回調査は第一回調査の補足であり、調査員に坂本経亮(当時、熊本県文化財専門員)や渡辺正気(当時、九州大学大学院生)、そして肩書きのない大六がくわわった。大六がこの沖ノ島調査に参加するきっかけとなったのは、当時、鏡山のもとで学んでいた渡辺正気からの誘いであった、という。ふたりは、前年に調査した志登支石墓群の整理作業を大学の研究室ですすめており、このとき渡辺から誘われたらしい。



中央の人物が大六



ローソクの灯の下で調査をする大六

調査隊は八月五日の早朝、鯛の水揚げでにぎわう福岡県神湊を幸運丸で出航し、正午頃に沖ノ島に着岸した。翌日から、七号遺跡を坂本、八号遺跡を大六・渡辺が担当し、調査区に1m方眼の区画をもうけ、調査を開始した。夏場のため襲ってくるアブに悩まされ、また岩陰調査のため日当たりもわるく、ローソクをたてて調査するほどであった。調査は、七号、八号、一六号遺跡の発掘だったが、大六の担当した八号遺跡から方格規矩鏡や金銅製歩揺付雲珠群、ガラス碗などが出土し、さらに滑石製白玉やガラス製小玉が全面に散布していたため作業が難航した。途中から調査をはじめた一六号遺跡からは三角縁神獸鏡などが出土したが、こちらも完了しなかった。七号遺跡からは鉄製武器類や珠文鏡、金銅製馬具類などが出土した。さらに、調査隊はあらたに二カ所（一四号、一五号）の祭祀地点を確認した。この調査によって祭祀遺跡の年代が四世紀代にさかのぼること、また遺跡の立地や遺物の種類の変化から祭祀が長期にわたって執りおこなわれていたことなどがわかったのであった。調査は同月一九日におわり、翌日無事帰港した。

第一次第三回調査は、社務所近くに無電塔が建設されることになり、昭和三〇年六月五日から一二日までその事前調査として大六と波多江一俊（当時、福岡県技師）が渡島し、縄文土器や弥生土器片を含む生活遺跡の調査にあたった。この調査のおり、九州大学教授で九州文化総合研究所長でもあった宗教学・社会人類学者の古野清人が見学に渡島している。古野は大六のよき理解者であり、イトノとの結婚式の媒酌人になった人物である。

そして、第一次第四回調査は、調査担当者の鏡山猛が、

第四回調査は取立てて記述する程でもないが、祭祀遺跡の写真や現状地形図及び巨岩の形状実測図等に補正の必要があったため、原田大六・渡辺正気両名に片山写真館の久光良城及び人夫四名が渡島し実測及び撮影にあたった。⁽⁹⁾

と、報告書のなかで記載した。のちに、この記載に大六はおおいに反発した。

二三 調査をめぐる確執

大六は沖ノ島第一次第一回・第二回調査を「完全な失敗」調査とかんがえていた。⁽¹⁰⁾ 報告書を作成するには地形図や写真記録が不十分である、とかんがえたからである。写真撮影は大六の理解者・支援者であった片山撰三（のちに九州産業大学教授）が経営する写真館の技師によったが、大六にいわせると鏡山の撮影指導がわるかった、という。大六はそれらのことを指摘し、対策を要請したのであった。そこで、同年七月に小島鉦作は当時、日本考古学協会委員長の藤田亮策とともに来福し、沖ノ島の報告書作成のための会議をひらいた。その席上で大六が、

調査時の写真は使い物にならないとかんがえます。

と、樹木を気にせず遺跡を撮影した写真をしめし、異議を申し立てた。藤田は鏡山の面前で写真の点検をはじめた。目の悪い藤田は、メガネ越しに一枚一枚の写真を丁寧に見て、ひとこと、これらの写真は使い物になりません、といったという。そのとき、大六は調査員を前に、

ソレみたことか。

と、発言したのであった。みなシーンと静まりかえった。出席した調査員はひとことの反論もしなかったので大六は、その失敗を認めた形になりました。⁽¹¹⁾

とかんがえた。宗像神社復興期成会会長代理の出光泰亮は、大六にどうすればよいか訊ねた。大六は、

考古学の発掘調査は、同一場所は一度しか発掘できません。発掘の失敗はとうにもなりません。

と、発言したが、なんとかしてくれ、との懇請で、

では、できるだけだけの事はしてみましようが、結果はどうなるかはわかりませんと、こたえた。この事実は、宗像神社復興期成会会長出光佐三には「言わぬ」という約束で第一次第四回調査が実施されたのであった。

この調査は、調査を批判した大六みずからが責任者となって、報告書作成に必要な写真の撮り直し、地形図の再測量、巨岩の測定の補充などを一〇月一七日から十一月三日まで実施した。このとき、村の青年団員四名を同道させ、かれらに写真撮影のとき、じまになる枝にぶらさがってもらった、という。一木一草たりとも刈ってはならぬ神域のため、巨岩などの撮影にじまな枝をそうした方法でのぞくなど、工夫しながらの撮影であった。

渡辺も調査時の写真は報告書に使えるものではなかった、という。しかしそれには、

宗像神社の宮司が鏡山先生にはやく写真をとってくれ、という催促があったものだから、先生は遺跡目録のつもりで撮影されたのであり、後日に正式に撮影するつもりだったろう。⁽¹²⁾

と、筆者に語ってくれた。けれども、大六は調査を徹底すること、細心の注意を払う、完璧な調査をすることを信条としており、性格的にも妥協することができなかった。

それから一四年後の昭和四四年になると、沖ノ島第三次調査が計画されたが、九州大学の関係者は沖ノ島調査メンバーに大六と片山をくわえなかった。このとき大六は、自分と片山の労苦が「抹殺」されたとかんがえ、書面でもって第三次調査をすすめていた岡崎敬（当時、九州大学助教授）をはじめ関係者に自分たちをはずす理由を問うた。⁽¹³⁾その後九州大学関係者と決裂した大六は、容赦のない批判をくわえた。昭和四八年に出版された『日本古代遺跡便覧』の「沖ノ島遺跡」の項目は大六の執筆であるが、このなかで、

発掘調査は昭和二九年五月の第一次第一回調査にはじまるが、同年八月の第二回調査までは、調査メンバーの編成失敗と、調査記録の無能による不完全さのため、報告書作成上取り返しのつかぬ醜態をさらけだした。（中略）報告書『沖ノ島』に副団長鏡山猛が「第四回調査は取り立てて記述する程でもないが」と記しているのは、自分の完全な失敗を隠蔽しているのである。⁽¹⁴⁾と、書いている。

さらに、この問題をあぶりだすために、

日本考古学者や同好の士に、沖ノ島発掘調査の報告書作成に支払われた労苦と、その困難克服を知ってもらい、片山教授と私の除名が、いかに非常識きわまるものであるかを認識してもらいます。⁽¹⁵⁾

と、大六は『怒濤の沖ノ島—宗像神社沖津宮祭祀遺跡の第一次第二次調査の実態—』と題する著作をかんがえたが、刊行にはいたらなかった。

さきの『日本古代遺跡便覧』には後日談がある。同書の増刷に際し、監修者の末永雅雄が大六に執筆部分の手直しを要請するために大六宅をおとすれた。当時、末永は関西大学の教授であり、昭和四七（一九七二）年には極彩色の壁画が発見された高松塚古墳の調査を指導するなど、わが国を代表する考古学研究者のひとりであった。末永は大六に、

「無能による不完全さ」とか、「完全な失敗を隠蔽している」、とかいう部分を書き直してもらえないだろうか。

と要請した。大六は、調査の実態をつぶさにのべ、

事実だからしかたがありません。

と、頑としてうけつけようとはしなかった。とうとう、末永はかたわらにいた夫人に、

奥さんからもなにかいってください。

と、懇願すると、イトノは、

先生、うちの主人が知っていることが間違っているならしかたがありませんが、主人はなにも間違ったことはいっていません、と思えますが。

と、こたえた。末永は、

もういい、もういい。わかった、わかった。

と、根負けしてしまったのであった。

高名な研究者からの要請ではあったも、大六は、事実は事実としてあきらかにし、安易な妥協はけっしてしなかったのである。その後、同書は絶版となった。

二四 沖ノ島第二次調査

話をもどそう。沖ノ島の第二次調査は、昭和三二（一九五七）年八月一三日から二六日までの第一回調査と翌年の第二回調査（八月三日〜九月七日）であり、大六は調査員として参加した。

第二次第一回調査は緊急に調査を実施しないと壊滅する遺跡があることが判明したこと、また第一次調査において調査未了の遺跡もあったことから計画されたのであった。⁽¹⁶⁾ 調査団長に鏡山、調査員に大六、渡辺、そしてあらたに乙益重隆（当時、熊本女子大学助教授、のちに國學院大學教授、賀川光夫（当時、別府大学助教授、のちに同教授）、小田富士雄（当時、九州大学大学院生）がくわわった。かれらは沖ノ島にわたると、八号遺跡を渡辺・小田、一六号遺跡を乙益、一七号遺跡を大六と賀川が担当することになった。大六らが担当した一七号遺跡では岩上から二一面にもものぼる三角縁神獸鏡や方格規矩鏡、内行花文鏡などの銅鏡や石釧、車輪石、管玉、勾玉などの碧玉製品、鉄刀などが集積してみつかった。出土鏡の豊富さでは、一級の前期古墳をしのぐものであった。

『続沖ノ島』には、賀川・大六の連名による「一七号遺跡調査日誌」が掲載されている。そこに、

前例のない遺跡に直面した時の調査担当者の戸惑いや、苦心が多分にあつて、（中略）僅か三平方メートルの狭い所に、二人で十一日間を費したもので、できるだけ正確な記録を作成するためであった。⁽¹⁷⁾

とのべ、遺跡の現状撮影では、

写真撮影に関する技術は両氏（筆者註―写真技師の花田・野口）に一任したが、撮影の位置・方向・範囲はすべて原田が指示し、ピントグラスは原田が覗き、その決定を得てシャッターを切ることにした。（中略）シャッタースピード及びシボリは野口氏が全部記録し、撮影枚数は報告書作成の目的をもって計画的に行い、原田がこれに従事。⁽¹⁸⁾

と、第一次調査の苦い経験をふまえ、徹底した調査方法・記録方法を実践した。

大六の綿密さがうかがえる。

この調査をおえ、帰宅した大六宅に親友の井上勇が訪ねている。大六はその前年にイトノと結婚し、今津から今宿の親戚宅へ居を移していた。海に近い四畳半の部屋であった。井上のアルバムには、

丁度沖ノ島の調査を終わって、シコタマ話題をためていて離そうとしな
い。（中略）数日前まで努力した君の
発掘談や研究結果などをきいて時間
の経つのを忘れたほど。⁽¹⁹⁾

と、海をながめる大六の写真とともに記録されていた。

そして、翌三三年の八月に第二次第二回調査が実施された。これは、前回の調査で鏡一面が露出していた一九号遺跡をおもに発掘するためであった。鏡山、乙益、大六、小田らが渡島し、全員で一九号遺跡にあたり、かつ一八号遺跡の現状調査などをした。

大六邸の書庫には、小さなノートに『沖ノ島 三三・八 原田』と題された、このときの調査日誌がある。調査は、当初一七日に出航予定であったが、あいにくの天候不良でのびのびとなり、大六はいったん帰宅、二三日に出航することになったものまにあわず、小田とともに遅れての参加となった。二六日、かれらは午前六時半に出航し、一時に沖ノ島に着岸した。さっそく調査隊に合流、みなで記念撮影となった。滞在中の調査は、午前八時から午後五時までを基本としたが、二九日から四日間、雨つづきのため、九月二日からは午前七時半開始、午後六時半、あるいは七時まで調査をつづけた。

この第二次調査によって、四世紀頃までさかのぼる沖ノ島祭祀遺跡の初期の様相がはっきりとしたのであった。



後列右端が大六。前列中央に鏡山、
同左端が乙益、右端が渡辺。

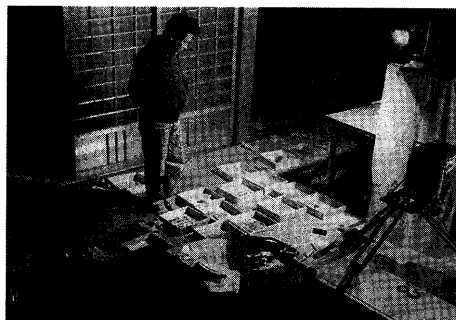
二五 沖ノ島出土遺物の整理作業

昭和三一（一九五六）年から大六は本格的に沖ノ島調査の整理作業に従事した。その責任者に宗像出身で九州大学教授・九州文化総合研究所長の古野清人があった。渡辺は、

古野先生は考古学が嫌いであったが、原田さんとは懇意にしていた。と、いう。おそらく、大六の処女出版『日本古墳文化―奴国王の環境―』を高く評価してのことであり、学歴はなくとも大六を研究者として認めていたのであろう。

当時、九州大学が中心となり発掘調査をした遺跡、大分県の安国寺弥生遺跡と福岡県志登支石墓群の調査報告書が未刊行であった。そして整理すべき沖ノ島遺跡があらたにくわわった。古野は報告書がでないことで所員を厳しくとがめ、分担して刊行するように指示した。そのため、安国寺弥生遺跡を鏡山と乙益、賀川、志登支石墓群を渡辺と小田、そして沖ノ島を坂本と大六、渡辺がおもに担当することになった。鏡山は英文による支石墓の論文をさらにかかえた。

沖ノ島遺跡出土遺物の整理作業は、宗像神社に宿泊しておこなわれた。当初、



大六が撮影を指導する

報告書は坂本を中心にすすめられ、執筆分担当を坂本が馬具類、渡辺が銅鏡と土器、大六が石製品類となった。大六は手ぬぐいを頭にまきつけ、一心不乱に仕事にあたった。あるとき、渡辺が原稿を大六に提出した。大六はそれを読み、

文章がなっていない。冗漫すぎる。文章を短くし、梅原末治（当時、京都大学教授）や三木文雄（当時、東京国立博物館）の文章を見習うように⁽²⁰⁾。

と、いった。その助言について渡辺は、

その後の文章作成にあたって非常に参考になった。また、原田さんは復元作業がほんとうにうまかった。

と、回想している。

大六は沖ノ島の報告書を、尊敬する小林行雄（のちに京都大学教授）のまとめた『大和唐古弥生式遺跡の研究』のような体系的なものにしたい、とつよく希望していた。それは報告書を遺構と遺物編にわけるといふかんがえで、これに対し渡辺は批判的で遺構とその出土遺物は一緒にまとめた方がよい、とかんがえていた。しかし、編集会議の結果、大六案が採用された。以後、渡辺はすこし嫌気がさしたようで、沖ノ島整理作業にあまりかかわらなくなり、みずからの執筆担当であった銅鏡の項目を大六にゆずることになった。

そうした整理作業をすすめるなかで、ある日、大六が坂本を殴打することがあった。坂本は戦前から熊本農業学校の教員や神社の宮司として活動する一方、熊本を中心に考古学研究をすすめ、県の文化財関係の要職にもついていた人物であり、かつ大六よりも年長者であった。なにがその原因であったのか、いまとなっては判然としない。渡辺や松岡も「その原因はよくわからない」と、筆者に語ってくれた⁽²¹⁾。

大六は軍隊生活においても下級兵を制裁することがなかった⁽²²⁾、ただし、理不尽な上官にはひとりでも立ちむかう勇気があった。こうした性格が災いしたのであろうか。

坂本は年長者でもあるため、大人の対応をとったのであろう、おおきな問題にはならなかったようだ。一連の経緯を知っているはずの古野だが、かれは報告書作成の編集会議の席上、坂本をはずす決定をした。古野のとった態度のなかに、殴打事件の本質にかかわることがあったのかもしれないが、若い渡辺には釈然としないものがのこった。渡辺は坂本に詫言状を書く一方で、助手としての自分の立場を顧みず、所長の古野に対し、考古学蔑視の態度に対する恨みもあり、三・四時間にわたり糾弾してしまった。

とうとう先生（古野）は、そんなに憎らしいなら、私を殴れ。

と、いった。立ちあがろうとした渡辺のまえに鏡山がわってはいり、ことなきをえた。温厚な渡辺としてはよほどの思いだったのであろう。渡辺は、

一緒に仕事ができない。鏡山先生も頼りにならない。

との思いがつのつた。こうした事件があっても鏡山は、大六の悪口をけっしてい
わなかった。

その後、渡辺は研究所を首になり、無給の生活になった。ようやく仕事についたのは、昭和三五年に福岡県教育委員会社会教育課の文化財担当として奉職したときであり、全国でも数少ない文化財担当の専門職となった。沖ノ島出土品整理でいっとき嫌気がさしても、渡辺はその後、県の文化財担当者として大六のさまざまな活動にたいして、よき理解者・支援者としての立場をつらぬいた。

二六 正統『沖ノ島』の出版

第一次調査の報告書『沖ノ島』が昭和三三（一九五八）年に刊行され、第二次調査の報告書『続沖ノ島』が昭和三六年に刊行された。この間、大六はほとんど沖ノ島の報告書作成のための製図・原稿執筆、編集に従事した。

『沖ノ島』は本文二七〇頁と図版一二二頁、そして英文要旨、序、目次からなる。執筆者は鏡山、大六、坂本、渡辺、そしてガラス分析の嶺正男・仙波喜美雄であり、遺物写真は片山撰三が撮影し、実測図は大六の手になる。大六の執筆部分はおおく、四〇〇字詰め原稿用紙にしておおよそ三〇〇枚にのぼった。

『続沖ノ島』は本文二九六頁、図版一〇四頁、そして英文要旨などがつく。執筆陣は鏡山、乙益、賀川、そして大六である。この書も前書と同様、大六の執筆部分が大半をしめ、四〇〇字詰め原稿用紙にしておおよそ四〇〇枚にのぼった。

正統『沖ノ島』の総原稿数は四〇〇字詰め原稿用紙で八〇〇枚ほどである。そのなかの七〇〇枚近くを大六が執筆したことになる。

さきに紹介したように、正統『沖ノ島』の報告書は随所に大六の創意工夫がみられ、現在でも戦後を代表する調査報告書のひとつである。当時、考古学では実

測図を製図する場合は、丸ペンを使用していた。現在では、太さのきまった製図ペン（ロットリングなど）を使用することがおおく、丸ペンは石器図面を製図するとき使用する程度であらう。

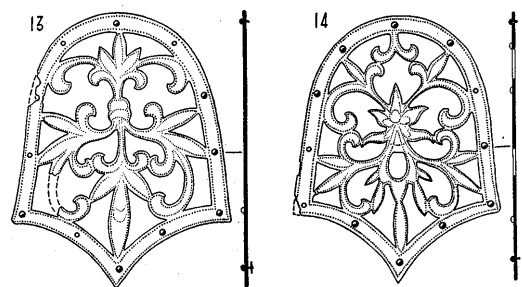
大六は毛筆で実測図を描いたのであった。筆者の実測図は、丸ペンに黒インクを含ませて書いたものではなく、硯で墨をすって、毛筆で描いたものである。硬いペン先の線と違って、軟い毛筆による曲線には、それなりの美感がただよふのを知っているからではあるが、

毛筆描き実測図には、かれこれ十数年の年期を職人として入れてきた⁽²³⁾と、のべ、さらに

古代職人の技術を知るためには、その職人に優るとも劣らない製図描写技術を修得した者でなくては、真実の実測図はできるものではない。実測図を職人の仕事ぐらいと成りてはならない。実測図を一見しても、その人が考古学的理解をいかにしているかは明瞭に判明するものである。⁽²⁴⁾

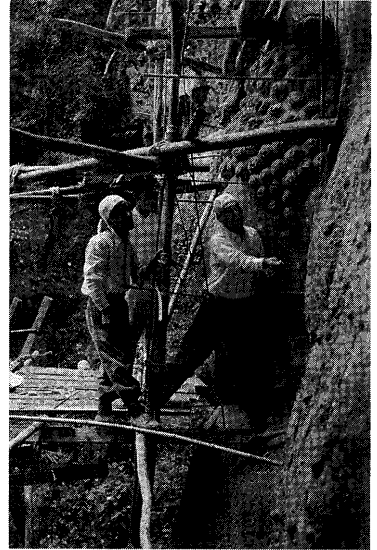
とものべている。古代の職人の技術にせまるため、実測図一枚たりともおろそかにしないのが大六であり、また、それは師中山平次郎の教えでもあった。現在まで何千という遺跡調査報告書が刊行されているが、毛筆で実測図をつくった報告書は正統『沖ノ島』以外にはない。大六の言は、現在の考古学調査において研究者みずから実測図を描くことをもせず、補助員たちにまかせる風潮に警鐘をならすものである。

また、拓本にも創意工夫をした。一般的に土器文様などの拓本をとるばあいは、土器面に水で面仙紙をはり、それを墨をつけたタンポでうってとるが、大六は文様の微細な部分まで判然とわかるように特殊な方法をもちいた。



大六の毛筆実測図（『沖ノ島』第53図より）

じつは、沖ノ島第一
次第二回調査をおえた
翌月、大六は九州大学
教授干潟龍祥の依頼で、
大分県にある熊野権現
磨崖仏調査に協力して、
大日如来の実測図と梵
字曼荼羅の拓本を作成



大六の調査時の磨崖仏権現熊野

したことがあった。干潟が、

原田大六氏の命がけの努力によって、ほぼ完全な拓本がとれたので、研究に
頗る便宜を得た。⁽²⁵⁾

と、その論文中でのべたように、地上約8mの高さに作られた足場に、二本の杉
の丸太がわたされ、大六はそれに腰かけ硯で墨をすって拓本をとろうとした。た
いへん危険な作業であった。しかし、拓本をとろうとしても砂粒のため梵字が浮
きでず、そこで大六は綿に薄い水墨をつけ、水墨のじむを利用して作成した
という。沖ノ島の遺物拓本もこのときの経験をいかしたのであった。

報告書刊行までにこんなこともあった。報告書進捗状況を説明する大事な日に、
大六は布団にはいったまま、でかけようとはしなかった。沖ノ島祭祀遺跡を歴史
上にとどのように位置づけるか悩んでいたのである。かんがえがまとまらず、布団
からでられない。そんな姿を見かねたイトノが、

きょうは大事な会議でしょう。でかけないのなら古野先生をよんできますよ。
と、声をかけると、

よべるものならよんでみる。

と、大六は唖声をきいた。イトノは古野をつれてもどってきた。驚いた大六は、
布団を蹴とばして飛びおき、古野の、

事実関係だけでもいいから報告しなさい。

という助言にしたがった。

大六にとっては遺跡の事実報告もさることながら、沖ノ島祭祀遺跡を歴史上に
位置づけること、祭祀の歴史的意義を明らかにすることが究極の目標であった。
沖ノ島祭祀遺跡の歴史的な位置づけは、その後刊行され、ベストセラーになった
『磐井の叛乱』（河出書房新社）のなかにかかれた。

現在、遺跡の発掘調査報告書は事実記載を中心とし、毎年膨大な数が刊行され
ている。その一方で、報告された遺跡の大半は調査終了後に破壊されてしまう現
実がある。遺跡をどのように地域の歴史、列島の歴史のなかに位置づけるのか、
文化財担当者の力量がとわれよう。日常的に遺跡調査をしている埋蔵文化財担当
者は、遺跡調査をして遺物整理にとりくむ大六の姿勢から、いまでもおおくの
ものを学ぶことができよう。

昭和二九（一九五四）年から昭和三六（一九六一）年の、大六が三七歳から四四
歳までの八年間を沖ノ島調査にしばらく跡づけてみた。大六は、正統『沖ノ島』の
調査報告書をほとんど単独で上げた。現在でも、この報告書のレベルをこえる
ものはほとんどない。沖ノ島調査メンバーの大半は大学に所属し、立場的にも経
済的にもめぐまれたなかにおり、ひとり大六だけは職がなく金銭的にもたいへん
な苦難のときであった。その大六が遺跡と格闘し、心血をそそいで報告書をつく
りあげた心意気は、研究者や埋蔵文化財担当者のみならず、考古学研究をこころ
ざすひとの手本となろう。

そうした大六の努力にもかかわらず、昭和四四年からはじまった沖ノ島第三次
調査は大六を排除する方向でおこなわれたようだ。その行為は大六の胸にすると
くつきささり、その衝撃のあまり、大六は前述のように「抹殺」とうけとったの
であった。大六は古野や片山、干潟など、考古学とは違う分野の研究者からは理
解と支援をうけた反面、身内ともいうべき考古学研究者からはその心情をほとん
ど理解されなかったようだ。以後、大六は「官学」とさまざまな場面で真っ向か
ら対決するようになっていった。

また、この間、東京大学出版会から処女出版『日本古墳文化―奴国王の環境―』を刊行し、雑誌『考古学研究』に論文をやつぎばやに発表するなど旺盛な執筆活動を展開した。一方、私生活ではイトノと三九歳で結婚し家庭をもつなど、転換期をむかえた。こうした点については、次号以降で紹介したい。

最後になったが、本稿を執筆するにあたって、イトノ夫人をはじめ、渡辺正気氏、松岡史氏から貴重なお話を伺うことができた。記して感謝申し上げたい。

註

- (1) 佐田茂 一九九一『沖ノ島祭祀遺跡』ニュー・サイエンス社。ほかに、小田富士雄「従来の沖ノ島調査」『宗像沖ノ島』(一九七九年、吉川弘文館)や『海の正倉院 沖ノ島―古代の祭祀西・東』(一九九五年、群馬県立歴史博物館)などを参照。
- (2) 原田大六 一九六三『磐井の叛乱―抹殺された英雄―』一三二頁、河出書房新社。文中には「南鮮諸国を威圧」という表現であり、この書の改訂版『新稿 磐井の叛乱』(一九七三年、三二書房)で「南朝鮮諸国を威圧」と表現をあらためている。
- (3) 原田大六 一九六〇「古墳時代前半期の祭祀」『考古学研究』第七巻第一号、一六頁。このなかでは「対大陸(南鮮)」と表現しているが、現在では不適切な表現のため、一部削除し、掲載した。
- (4) 宗像神社復興期成会編・刊 一九五八『沖ノ島』。同書は、一九八六年に吉川弘文館から復刊されている。
- (5) 宗像神社復興期成会編・刊 一九六一『統沖ノ島』。同書は、一九八六年に吉川弘文館から復刊されている。
- (6) 藤田亮策 註(4)の「序」。
- (7) 出光佐三 註(4)の「序」。
- (8) 鏡山猛・原田大六ほか 註(4)と同じ。沖ノ島調査の各調査については同書による。
- (9) 註(4)の二〇頁。

- (10) 原田大六 一九六〇「宗像神社沖津宮(沖ノ島)祭祀遺跡の発掘調査延期要請の件」。
- これは、昭和四五年一月二日づつで、九州大学助教授岡崎敬以下、七名に発送した意見書。
- (11) 註(10)と同じ。以下、本文中のやりとりも同じ。
- (12) 二〇〇四年三月二六日、渡辺取材。
- (13) 註(10)と同じ。
- (14) 原田大六 一九七三「沖ノ島遺跡」『日本古代遺跡便覧』(末永雅雄監修)、社会思想社。
- (15) 註(10)と同じ。
- (16) 鏡山猛・原田大六ほか 註(5)と同じ。
- (17) 註(10)の二九三頁。
- (18) 註(5)と同じ。
- (19) 井上哲保管の井上勇のアルバムから。
- (20) 二〇〇四年三月二六日、渡辺取材。
- (21) 二〇〇四年三月二六日、渡辺取材と二〇〇四年二月二九日、松岡史への電話取材。
- (22) 黒木正男 二〇〇一『わたしのときをこえて』(私家版)。
- (23) 原田大六 一九六一「沖ノ島の職人」『考古学研究』第八巻第一号、四頁。
- (24) 註(23)の五頁。
- (25) 千潟龍祥 一九五八「豊後高田市熊野権現石仏頭上の梵字マンダラについて」『印度学仏教学研究』一月号。

(きくち せいいち 歴史文化学科)